

第8回新鋭評論賞

正賞

虫愛ずるひと、犀星

池田瑠那

虫愛ずるひと、犀星

序論

「犀星は俳句にはじまり俳句に終わった人である。」「室生犀星句集 魚眠洞全句」昭和五十二年刊）注1 長女朝子にこう評される通り、文筆家室生犀星の原点は俳句にある。高等小学校を中退し、金沢地方裁判所の給仕となった犀星は、ふとしたことから検事局監督書記である川越弥一に作句の手ほどきを受けるようになった。そして明治三十七年十月、照文の名で投句した「水郭の一林紅し夕紅葉」の一句が、初めて「北國新聞」俳壇欄に掲載されたのである。

時に犀星十五歳、自分の作品が人から認められる経験は、養母に虐待されて育った少年の自尊心を回復させる助けとなったことだろう。また、言葉による創作活動がもたらす深い喜びを知らしめるものとなったことだろう。当時の感慨を後に自叙伝『泥雀の歌』（昭

和十七年刊)ではこう書いている。注2

〔勤め始めた日に老巡査から「シンマイノ給仕サンカ」と言われ〕子供にも子供の地位とか名誉とかがあるものなら、それはこの給仕サンと呼ばれたときにすつかり失くなつたも同様であつた。へ中略〕そのうち私の俳句が新聞にのるやうになり、私の本名よりも雅號を呼ぶ人が多くなつて行つた。私は一度失つた例の名誉と地位とをどうやら少しづつ取り返すことができたやうな気がした」

後に詩、小説、随筆と多方面で活躍することとなる犀星の文学的情熱の火種は、俳句をきっかけに宿つたものだったといえる。

約十年余に及ぶ中断期間(明治末年から大正十二年まで)を挟むものの、犀星は晩年に至るまで俳句に親しみ続けた。生前に四冊の句集を上梓しており、没後まとめられた『室生犀星句集 魚眠洞全句』には千七百四十七

句が収録されている。「鯛の骨たたみにひらふ夜寒かな」(大正十三年)「雪ふるといひしばかりのひとしづか」(昭和十五年)等の句は広く知られるところであろう。また、「(芭蕉の)氣魄がどういふふうに自分に打込んで来たかといふことを瞭かにしたい」という思いから執筆した評論集『芭蕉雑記』(昭和三年刊)の著作もある。注3

さて、そうした犀星の句を通読した際、筆者は昆虫を題材にした句に特に心惹かれた。三十代以降作庭に凝った犀星だが、その丹精した庭に来る昆虫たちにも、また屋内に入り込む昆虫たちにさえも、至って寛容であった。「家庭の中で害を加える蠅と蚊だけが、殺してよいものであった。蟻の行列がどこかで起きると、その辺りは気をつけて踏まぬように歩くこと」と私は子供の頃から言われていた。『父室生犀星』昭和四十六年刊)注4と長女朝子も回想している。夏を過ぎす軽井沢の山荘では十数個もの虫籠にきりぎりすや草

ひばりを飼い、さらに二籠程は東京にまで伴って帰った。こまめな世話の甲斐あって、クリスマスまで生き延びた虫もあつたという。このように昆虫を心の友とした犀星だが、では犀星の俳句作品において「昆虫」は何を象徴しているのだろうか。本稿では句中で「昆虫」がどのような存在として描かれてい

るかを検討し、これを解き明かしていきたい。1 隠れひそむもの  
犀星俳句における昆虫は、人目を避け、物陰などに隠れひそむ存在として登場する。

雨細き若葉の裏の毛虫哉（明治三十九年）

馬の耳に蠅冬籠る夕かな（同）

跛ひいて蝗は椽に逃れけり（明治四十年）

うとき蚊の逃る庭やユキノシタ（明治

四十一年）

草かげでいなごがひとり微笑うた（大正

十三年）

これらの句には雨粒の直撃や冬の寒さ、捕食者や人間の脅威を避けて生きのびようとする姿、また危機を逃れて安堵する昆虫の姿が生き生きと描かれている。「蚊」は序論で触れた通り、流石に昆虫好きの犀星も「殺してもよいもの」としているが、句中で可憐なユキノシタの花を配しているあたり、鬱陶しさを感じつつもこれを根絶してしまおうといった憎しみは感じられない。

見付けたる蛇の卵や夏の山（明治四十年）  
草の葉に晝の螢や尻あかし（同）

葉の裏に蠅の木伊乃や冬牡丹（明治四十年）  
一年）

昆虫たちは「隠れひそむもの」であり、虫嫌いの人々からすればわざわざ視界に入れたくないものである。だからこそ、その姿を句に書き留める作者の眼差しが時に強調される。雄大な「夏の山」の懐にあって微小な「蛇の卵」を「見付け」、光を放つこともない「晝の

螢「が草葉を這っているのを見出しては「尻  
 あかし」と踏み込んで描写する。「蠅の木伊  
 乃」に至っては、豪華な冬牡丹を前にしなが  
 ら花ではなく葉の裏を見つめ、そのようなも  
 のを発見する者はまずいないだろうと思わせ  
 る句である。これらの句からは「隠れひそむ  
 もの」である昆虫、その中でも世の多くの人  
 が目を留めることのなさそうな昆虫に対し、  
 自分だけはいしかと歩み寄って描くのだとい  
 う姿勢が見て取れる。  
 他「蟬殻のついたるままや桐一葉」(明治  
 四十年)、「竹の葉のひるの螢を寂しめり」  
 (昭和三年)、「日ざかりや庇にのぼるかぶと  
 蟲」(昭和十八年)なども、世人が見落とす  
 がちな昆虫の姿に目を留めた句といえる。  
 以上見てきた通り、犀星俳句において昆虫  
 は「隠れひそむ」存在として登場し、時にそ  
 うした存在にあえて目をやる作者の眼差しを  
 意識させるものとなっている。

「夏の日の匹婦の腹に生れけり」(昭和十八年)と自ら詠む通り、犀星は明治二十二年八月一日、妻に先立たれていた元加賀藩士小島吉種と同家の女中との間に非嫡出子として生を受けた。実父は当時既に六十代半ばであった。家の体面を保つため、赤子は命名もされぬまま養育費と共に雨宝院住職の内妻赤井ハツに手渡される。生家である小島家と養家の雨宝院は徒歩圏内の距離にあるだけに、自分の出生が祝福されず、秘匿されるべきものであったことを幼心に痛感する機会は多かつたことだろう。

ハツには犀星のほか三人の養子があったが、子らをこき使い、折檻を加える気の荒い女性だったという。また犀星が九歳の時、実父吉種が死去すると生母とみられる女性は小島家を出てゆき、その後の消息は不明である。厳しい自然界にあって昆虫たちは生存を賭けて身を隠し、物陰にひそむ。そして、ほとんどの種の昆虫は子育てをせず「産みっ放し



である。こうした昆虫の生態には、出生を伏せられるべき存在として誕生し、実父母から見放された犀星自身の境遇と図らずも重なる点が多い。

自伝的小説『幼年時代』（『中央公論』大正八年八月初出）注5に主人公が、行方知れずの実母の幸福を仏像に祈願する場面がある。

「がらんとして大きな壓しつけて来るやうな本堂の一隅に、私はまるで一疋の蟻のやうに小さく坐つて合掌していた。私は人人の遊びざかりの少年期を斯うした悲しみに閉ざされながら、一日一日と送つてゐた」。

つまり犀星は本堂の一隅で祈る「遊びざかり」の頃の自分を「一疋の蟻のやうに」感じとっていたといえる。

また『十九春詩集』（昭和八年刊）所収の短詩「考へる虫」（明治四十一年九月）にはこうある。「虫は這へり／灰いろのしめれる

壁に／いとゆるやかにかげをひき。／窓のそ  
 となる秋風に／羽立てぬ虫のころは。」注6  
 羽を持ちながらそれを広げて外の世界に飛  
 んで行こうとはせず、屋内にひそみ、灰色の  
 壁を這いつつ考えに耽るこの「虫」には、十  
 九歳の犀星の内心がかなりの程度、投影され  
 ていると考えられる。  
 句中においても「隠れひそむ」存在として  
 登場する昆虫たちは、作者犀星の、殊に幼少  
 年期の自分の分身だと考えられるのである。  
 2 鳴き声をあげるもの  
 犀星俳句における昆虫は、また、「鳴き声  
 をあげる」性質を持った存在として登場する  
 そもそも俳句の世界では「虫」とのみ言え  
 ば秋に鳴くキリギリス科、コオロギ科の昆虫  
 を指し、虫といえば美声を愛でるものだとい  
 う認識がある。夏の季語である「蝉」や秋の  
 季語である「蛸」等にしても、鳴くことは自  
 明のものである。そして、それ故に句中では

「声」「鳴く」といった語は省略されてしま  
うことも多い。しかし犀星俳句においては、  
「虫」あるいは「蟬」等が登場する際、それ  
が鳴くこと、あるいは本来鳴くものでありな  
がら鳴けないことがしばしば強調される。  
本章ではまず①「鳴くもの」②「鳴けない  
もの」に分け、それぞれ句中でどのような存  
在として描かれているかを検討していくこと  
とする。

## ① 鳴くもの

秋ぢやもの別れぢやものを虫が鳴く（明  
治四十年）  
いとどらは何を鳴くらむ草の中（昭和十  
三年）  
機織の晝のすだきのしげくなり（昭和二  
十四年）  
これらの句において虫たちは、ただ漫然と  
美しい音色を発するものではない。秋の物悲

しさを歌いあげる存在であり、「何を鳴くらむ」と問われる存在——すなわち何かしらの意思を持って鳴いている存在であり、昼でありながら何かに駆り立てられるようにいよいよ烈しく鳴きしきる存在である。本来、虫が鳴くのは縄張りの主張や求愛という切実な理由によるものだということをも改めて意識させられる。

蝉 あはれ生きてなくからに腹の琴（昭和十三年）

蝉を詠んだこの句などは「生きて」いること「なく」ことが一匹の蝉の中で渾然一体となつていゝ感がある。全存在をかけて「腹の琴」を鳴らす蝉を「あはれ」と見ていることから、犀星が蝉のそうしたありように深い共感を寄せているのが伝わってくる。なお、鳴く虫の中でも「蝉」は犀星にとつて郷里金沢の風物を思い出させるものだったようである。

再上京を繰り返していた。木戸も指摘して  
 は、大正四年頃まで経済的困窮による帰郷、  
 明治四十三年五月に最初の上京をした犀星  
 と指摘している。注8  
 略々そのまま作者自身でもあったのである。  
 むとして／熱き夏の砂地をふみし子／はへ中  
 心を捉えるのであった。へせみの子をとらへ  
 京で聞く蝉の声が／犀星の渴くような望郷の  
 内容である。この詩について木戸逸郎は「東  
 や」注7と蝉捕りをした少年時代を回想する  
 夏の砂地をふみし子は／けふいづこにあり  
 なりしか／せみの子をとらへむとして／熱き  
 で蝉の声を聞きとめた主人公が「はや蝉頃と  
 大正二年九月号初出」という詩がある。東京  
 「抒情小曲集」所収の「蝉頃」(スバル)  
 十四年)  
 ふるさとよよれる柱に蝉の来る(昭和二  
 四年)  
 ふるさとや松に苔づく蝉のこゑ(大正十

るところであるが、下宿のあった谷中界隈で耳にする蝉の声の印象について犀星はこう書いている。注9

「私には遠い蝉の声が応へた。へ中略へ谷中界隈ではいたるところの屋根の向ふ側や、街をへだてた谷間の裏町などでこの蝉は眼薬をさすやうに、故郷の風物を鮮かにゑがき出させた。あんなにいやだった故郷がこんなにうまく心にはまりこんで、私をあまやかしてくれるとは些つとも考へなかつたことだ。」(泥雀の歌)

代々の入れ替わりを重ねながら、蝉は毎年変わらぬ鳴き声を夏空に響かせる。そうした蝉の声は犀星にとって、時空を超え、少年時代を過ごした故郷と現在とをつなぐはたらきを持つていたようである。先に挙げた二句においても、蝉は愛憎双方の対象である「ふるさと」につながる存在として登場している。

②

鳴けないもの

行きもどり驛のいとどの絶えにけり（昭

和十五年）

秋あはれ啼く聲おさめ蟲のゐる（昭和十

八年）

きりぎりすはたとやみけり敵の径（昭和

三十四年）

一句目では所用あつて行きつ戻りつするそ

の間に、駅周辺で鳴いていたいとどの声が止

んだという、小さな発見を詠む。二句目では

鳴かなくなつてしまつた蟲が、なお生きてい

ることに秋の「あはれ」を感じている。三句

目はつい先刻まで鳴きしきつていたきりぎり

すが、不意に鳴かなくなつた一瞬を捉える。

三句とも本来「鳴くもの」である虫が声を上

げないことから生まれる違和感や寂寥感が句

の中心となっている。

みんみ蝉の吃り夏ゆく（大正十三年）

秋蟬の吃々として歎みにけり（同）  
 鳴きしきつていた蟬がつつかえる様子をありと描く。ゆく季節を惜しむ思いや、蟬の命の短さも思われる。  
 しらかばにせみのゐるまま啼かずけり（昭和八年）  
 蟬一つ幹にすがりて鳴かずけり（昭和十八年）  
 一向に鳴きださない蟬の様子を描く。「ゐるまま」という時の経過を感じさせる描写、  
 「幹にすがりて」という細部の観察からは、ある程度の時間をかけて樹に止まった蟬を見ていた作者の姿も浮かび上がる。  
 以上見てきた通り、犀星俳句において昆虫は「鳴く」「存在」、また、本来鳴くものでありながら時に「鳴けない」「存在として登場している」。また、「蟬」は作者の望郷の念を呼び起こし、過去の「ふるさと」と現在をつなぐ



存在という側面も持っている。鳴く虫への愛情を描いた『蟲寺抄』（昭和十七年刊）注10に、「野の獅子」と喩えられるほど元気溢れ、鳴き声を響かせていた轡虫を飼う話がある。秋の深まりにつれて轡虫が徐々に弱っていくさまが克明に描かれてい

るのだが、十月の末にほぼ鳴かなくなっ

てしまった轡虫が、死の二日前に突如短く二声鳴く姿があわれを誘う。昆虫にとって「鳴く」ということは相当にエネルギーを消耗する行為なのだとも気づかされる。

胡弓弾き「轡虫の鳴き声を「交響楽」と呼び鳴く虫一般についても「彼らは鳴きながら詩もつくり歌もつづつてゐるに違ひなかった。」としてい

る。鳴く虫たちに対するこうした眼差しはやはり、犀星自身が創作を一生の仕事とした者だからこそ注がれたものではないだ

ろうか。虫たちが鳴くことに生命を燃やすよ

うに、犀星も生みの苦しみに耐えて、自らの

中から言葉を絞り出し続けたのである。  
 したがって句中において「鳴き声をあげる  
 (鳴けない)」存在として登場する昆虫たちは  
 作者犀星の、殊に表現者としての自分の分身  
 だと考えられるのである。

なお「蟬」は時空を超えて郷里と犀星とを  
 つなぐはたらきを持つが、犀星がたびたび  
 「ふるさと」を文学の題材としたことと照ら  
 し合わせると、これも表現者犀星と関連する  
 ものと考えられる。

3 生活空間を共にするもの  
 犀星俳句における昆虫は、「生活空間を共  
 にする」存在として登場する。

冬の蠅命つれなき爐の邊り(明治四十一年)

床に入りて繙書の癖や夜々の蚤(同)

地球儀や蜻蛉とまれる造り物(同)

いづれも犀星十九歳の年、金沢の俳壇では

年少の俳人として期待を集める存在となつていた頃の作である。室内に入り込んでくる昆虫たちを忌避することなく、同情や親しみを込めて詠んでいる。

庭近き机露けきいとどかな（大正十四年）

きりぎりす夜明けの雨戸明りかな（大正

十五年）

きりぎりすゆざまし冷えて枕もと（昭和

二年）

まくらべのさかづきなめる鼈馬かな（昭

和十二年）

枕べにすいちよ鳴かせ眠りけり（昭和十

五年）

機織やマチする夜半のたばこかな（昭和

二十三年）

以上の六句は三十代以降、既に詩人、小説家として知られる存在となり、家庭を持つ身ともなつてからの作である。

犀星は大正九年以降、軽井沢での避暑をな  
 らいととしていた。さらに昭和十九年夏には戦  
 火を避けて家族と共に疎開、二十四年九月に  
 至るまで軽井沢を生活の拠点とする日々を送  
 っている。長女朝子は『父室生犀星』に、  
 「軽井沢の夏の生活で、父は『虫』と毎日、  
 会話して過ごしていた。へ中略、夜は自分で  
 二つの虫籠を選び出し、『今夜はこの虫がお  
 伽をする。』と枕元の煙草盆のそばに置く。数  
 多い虫の鳴き声も、父には、よい声、上手な  
 鳴き方の区別がつくのであった。」注 1 1  
 と山荘生活の様子をつづる。  
 自然豊かな環境を背景に、句中の昆虫たち  
 もかなり間近に感じられる存在として登場す  
 る。執筆に励むための机は、庭で鳴くいとど  
 と同じく「露」の湿りを帯びているし、きり  
 ぎりすの声は雨戸越しにも漏れ聞こえる。虫  
 たちは「枕もと」「枕べ」に美声を響かせ、

煙草を喫むひと時に寄り添ってくれる存在なのである。なお、「きりぎりすゆざまし冷えて枕もと」（昭和二年十月）の句は「我が近況」の前書きを持つ。この年の七月、犀星の畏友芥川龍之介が自死したことを思い合わせると、冷えた湯冷ましに一種の虚脱感が託されているようにも思える。

夜の疊ひとつ蟻ゐてかそかなる（昭和二十六年）

七月十一日、詩人乾直恵（明治三十四年—昭和三十三年）宛の葉書にしたためられた一句である。夏の夜、疊を這う一匹の蟻を追い払いもせず見守る老作家の静かな眼差しが感じられる。

昭和二十三年に日本芸術院会員となるという栄誉を受けた犀星だが、翌二十四年に随筆集『泥孔雀』を刊行して以降は「この後、数年間新作の刊行なく、次第に過去の作家とな

りつつある悲哀を味わう。」（船登芳雄）注 1  
 2 とされるような停滞に陥る。群れからはぐ  
 れて畳の上を彷徨う蟻の姿は、犀星の内なる  
 鬱屈に響くものがあつたのかもしれない。  
 以上見てきた通り、犀星俳句において昆虫  
 は「生活空間を共にする」存在として登場し  
 ている。執筆し眠り煙草を喫む、生きた身体  
 を持つて生活する犀星の傍で、昆虫たちはそ  
 れぞれの本性のままに儂い生を全うしてい  
 ながら「泥雀の歌」では軽井沢での山荘暮ら  
 しの様子を  
 「十年前に小さいこほろぎ箱のやうな家を建  
 て、そこで二匹の親こほろぎは二匹の子供の  
 こほろぎを連れて、毎夏その野で仲よく暮  
 した。親こほろぎは冬の用意をととのへる蟻  
 のやうに稼ぎ、足も、羽も、もう大方すり切  
 れ胴ばかりのやうになつても、餌をさがして  
 へ中略へ歩いてゐた。」注 1 3

とユーモラスに描く。この文章中では犀星は全く「こほろぎ」になり切ってしまったているのである。また、『日本美論』（昭和二十八年刊）所収の詩「耳」は「物語をかき／そして、寝れはてて蝗のやうになつて／死ぬ奴がゐる、一體そいつは誰だらう、／骨と皮になつてゐた奴は誰だらう。／この僕さ。」注14と自嘲的に結ばれている。執筆に精力を注ぐあまり、寝れきってしまった自身を「蝗」になぞらえているのである。

句中においても、身近な昆虫たちは犀星にとつて、起伏多い人生を送る生活者、家庭人としての自分の分身であつたのではないかと考えられるのである。

結論

本稿では犀星の俳句作品において「昆虫」が何を象徴しているのかを探ってきた。句中において昆虫は「隠れひそむ」存在、

「鳴き声をあげる（鳴けない）」存在、「生活空間を共にする」存在として登場する。そしてそれらは犀星の幼少期の姿、表現者としての姿、生活者としての姿にそれぞれ対応するすなわち句中に登場する昆虫たちは、作者犀星の分身だと筆者は考える。

（注）

（1）『室生犀星句集 魚眼洞全句』北国出版

（2）『室生犀星全集』（以下、『全集』新

潮社 昭和四十二年 第八卷 一一一頁

（3）『全集』第三卷 三五三頁

（4）室生朝子『父室生犀星』毎日新聞社

昭和四十六年 一六六頁

（5）『全集』第一卷 一六七頁

（6）『全集』第一卷 一三四頁

（7）『全集』第一卷 四五頁

（8）木戸逸郎『ふるさと遠きにありて』

室生犀星詩伝『宝文館出版 平成元年



四九頁

(9) 『全集』第八卷 一三六頁

(10) 『全集』第八卷 二八六—三一七頁

(11) 『父室生犀星』 一六七頁

(12) 船登芳雄 『評伝室生犀星』三 弥井書

店 平成九年 二八九頁

(13) 『全集』第八卷 一六五頁

(14) 『全集』第八卷 三九頁